

第45回 中高校生の吃音のつどい(サマーキャンプ)

8月8日(土)、9日(日)、小学生5人、中学生1人、高校生6人、ご両親8人、スタッフ21人の計41名が参加。富士五湖の山中湖畔の民宿、華林にて開催。これで最後だから、絶対に悔いを残さない。自分を出し切る。そして、自分も楽しむ！そう思って頑張ったサマーキャンプ。終わってみて、大満足な2日間になりました。やればやっただけのものが返ってくる。サマーキャンプをやり切った達成感言葉では表せないものになりました。

目立ち過ぎたのと、いろいろな面で自分勝手過ぎた(ゴメンなさい…)のが反省点。思い切り自己満だったような気がします。これでいいのか、皆の笑顔を見つける度に、心の中でほっとしていました。みなさんお疲れ様です。そしてありがとうございました。(リーダー;海野芳枝、中田周作、海老原亮平、菊地香央莉)

C.Y君(小2)

サマーキャンプに行くまえは、ぼくは、100パーセントのうち、70パーセントぐらいがきつ音になっていました。

サマーキャンプに行ったら、はずかしくて、1回かえろうかと思いました。でも、キャンプに行ったら、たのしくて、ずっといたいと思いました。そして、ことばがつまるのが、ぼくとお友だちだけかと思っていたのに、まだ、いっぱいいるんだとわかってあんしんしました。みんな、ぼくよりもきつ音になってる人ががんばっていたから、ぼくもそれをまねして、がんばっていきたいです。

このキャンプにさんかして、よかったです。また出れるきかいがあつたら、ぜひさんかしたいと思っています。

Y.Yさん(小2 C.Y君のお母さん)

サマーキャンプがあることは知っていました。ことばの教室に案内がありましたし、先生からのお誘いもありましたから。けれどその程度でした。

ある時、「ことばのキャンプがあるんだけど行く？」息子に聞いてみました。もちろんNOの返事があることを承知で。ところが、「行く！」びっくりしました。が、あまり理解していないんだろうと、申し込む踏ん切りがつかずにいました。案の定、ことばの教室のみんなが行くと思っていたことが発覚し、「今回のキャンプは皆さんこんにちは。お友達になりましょうのキャンプなんだよ。」と言うと、「行く！！」よし！と私も決心し、参加することになりました。

とは云うものの、不安と心細さを抱えての参加となりました。

皆さんと合流し、到着し、キャンプが始まりました。皆さんの体験談を聞き、VTRを観、自分の中の溜まりに溜まったモノを吐き出しました。心の中が軽くなりました。自分と同じ思いをしているご家族との話は、本当に、共に笑い、共に泣けるものでした。それと同時に、息子が本当に楽しそうにしている(母と離れているにも関わらず)のを見て、参加して良かったと、つくづく思いました。

けれど、正直、私の中のわだかまりは消え去ってはいませんでした。息子が楽しい思いができて良かった。それが一番の参加した収穫だと思っていました。ところが……

帰宅した翌日「キャンプで思ったこと、話してみようよ。」「うん、いいよ」

今まで吃音について聞いてもきちんと話してくれなことがなかったので、これで、既然大変驚きました。

「来年もまたキャンプに行って、大きくなったらお兄さん達みたいになる」

「ことばがつまるのもいろんな人が、いろんな風につまるんだよ。」

「キャンプに行くまで、世界中で僕が一番つまると思ってたんだよ」

「僕もお兄さん達みたいいろいろなことやってみたい！！」

次々と溢れ出る言葉を聞きながら、今回このキャンプに参加した喜びを、ひしひしと感ずることが出来ました。そしてこのキャンプ以来、吃音について、正直に親子で会話することができるようになりました。嬉しい限りです。このように私達の前の壁を取り払うきっかけを作って下さったスタッフの方々やご一緒させて戴いたご家族の皆様へ感謝すると共に、将来、息子がスタッフとなって、この喜びを伝えていってくれることを願っています。

E.0さん(小4)

私は吃音を持っているけれどみんなからかわないで下さい。みんなもつかえたりするでしょう。それと同じで、そのつかえる量が多いか、少ないか、ただそれだけです。からかった人は自分がからかわれた側になってみて下さい。どれだけいやか分かりますか。分からないでしょう。それこそが人間人々老若男女関係なく持っている個性です。絵をかくとか、外で野球をやるとかあるでしょ。

この地球という星はだれもがしょうがいを持っていないということだったらすばらしい国でしょう。でも吃音とかしょうがいを持っている人たちがいないとこの地球は成り立たないと思います。吃音を必死で治そうとしている人がいますが、私は治そうと思っただけありません。もちろん私は、好きで吃音になったわけじゃないんですけど、それをたまに「○○○ちゃんはいいいけど、○○○ちゃんは病気みたいでいやだなー。だから○○○ちゃんとは遊びたくないよ。」という人がいます。私はその、からかった人には「地球には、そういう吃音を持った人がたくさんいます。なやんでいるかも知れないけど、みんな、とてもがんばっているのにそれを笑うということはそのがんばっている人をきずつけることになるから、からかうのはもうやめて。」と言ってみたい。勇気があることだけど、自分の伝えたいことをちゃんと伝えたらそれでいいと思います。

(↑キャンプ中の「作文教室」で書かれたもの)

私は今回のサマーキャンプで一番楽しかったのは、花火大会です。そしてバーベキューのお肉もとてもおいしかったです！それから、どもりの話をみんなとたくさんできて、いい経験になりました。Sちゃんと私は親友です。Sちゃんとは、どもりではない人にはわかってもらえない事も、Sちゃんといると気持ちをはかち合えるので、大切な大切な友達です。

紫々尾ななおさん(高2)

吃音について作文を書けと言われると、私は非常に困る。なぜかと言うと、それは多分、最近では吃音について悩んだり考えたりすることがなくなったからだ。

思い返せば小学校高学年から中学にかけて、吃音というものは私の生活におけるおもしろだった。イメージで言うなら、1kgくらいの石ころだろうか。年度はじめの自己紹介はもちろん、学芸会の劇やレポート等の発表など、そのおもしろは時としてねばっこく私の足にまとわりついてきた。そして私は、そのおもしろを気にせず歩くことができなかつた。何度も、しつこいまでにおもしろを見下ろしてはため息をついていた。そうしているうちに、石ころの形状や凸凹の具合を覚えてしまった。そんな日々だった。

では今の私はそのおもしろを気にせず歩け、石ころの特徴を忘れてしまえたかと言えば、それは否だ。相変わらず1kgの石は私の足にからみつきねばっこくついてくる。しかし、その1kgという重さをあまり重いと感じなくなったことは確かだ。小学生の頃は持ち上げられなかつた米の袋を大きくなつたら抱えて歩けるようになったとか、そういうイメージだろうか。訳の分からない比喩を使ってしまったが、要するに、私の吃音に対する考え方が軽くなりましたということだ。吃つたら吃つたでそんなときゃそんなとき。

別に周りの人は、「〇月〇日の〇時〇分に〇〇という言葉でこの人が吃つた」なんて覚えちゃいない。一晩たてば、当人である私でさえ記憶があいまいになっているのだ。だから吃音についてあれこれ考えることは無駄とは言わないが、何かもう面倒くさくなつてきた。いや誤解はしないでほしいのだが、私は別に「吃

音なんぞ関係ないさ、だって私には素晴らしい未来が待っているんだから！」なんて輝かしいことを思っている訳ではない。悩みゼロなんかではない。ただ前を比べれば、それほど気にしなくなったということだけだ。

ちなみに私は**演劇部**で「部下1」という役をやっている。嘘じゃありません。本当です。それなりに長いセリフがあるし、言えなさそうなセリフもあるし、他の部員の皆には多大な迷惑をかけている。しかし、私は演劇をやっている。そのことが、私の中の「1kg」がかなり軽くなったことを示す確実な証拠ではないかと自分では思う。喜ばしいことではないか、うん。

まあこんなふうな考え方ができるのは今だけ、一時のものかもしれないが、それでもこの自分の成長には、麦茶で乾杯したい気分だ。いや、これが果たして「成長」と言えるのかどうかは知らないが。とにかくめでたいことだと私は思う。ので、乾杯。（↑キャンプ中の「作文教室」で書かれたもの）



やはりサマキャンは楽しいですね。中高校生のつどいの中で、前はお料理教室が好きだったのですが、今は断然サマキャンです。泊りがけだと時間がたくさんありますし（本当はもう一、二泊欲しいところですが）、夏というところもいいです。こういう宿泊イベントは夏に限ります。夏は風情がありますよね。特に良いのは夜でしょうか。夜の暗闇には、人の精神を高揚させる作用があるのかもしれない……話がずれてきましたね。すみません。

サマキャンについてここに書くようなネタは特になのですが、今回割と印象に残っているのは最後の「一人一言」でしょうか。印象に残っているといっても、もう少したてば忘れてしまうかもしれませんが。

私は最後の「一人一言」を、いつも、皆同じようなことを言うからあまり面白いものではないなと思っています。いや、「一人一言」に面白さを求める私がおかしいのは十分承知しています。私は「ここに来て救われました！」といった、涙を誘うようなセリフは絶対に言いたくありません。そういう感動的な言葉は私の好みではありません。いや、別に感動的なセリフを否定している訳ではないです。ただ自分で言うのが嫌なだけです。お気持ちを害された方がいたら申し訳ありません。悪意はありません……。

ただ今回の「一人一言」には、私は不覚にも少しだけ感動させられました。何なんでしょう、今回は、私の鳥肌を立たせるような言葉を口にされた方が多くいらしたのです。いや、「鳥肌が立つ」はもちろん比喻です。実際にたった訳ではありません。何と言うか、ここに来ている方々は皆色々な苦勞をしてきたんだな、と思ったのです。人生に苦勞の無い人は多分いないでしょうから、別に吃音人だけが辛いことを経験している訳ではありません。ただ、苦勞の種類が他の人とは違うぶん、余計に重く感じてしまう。吃音人は、他の人にはなかなかわからない苦勞を積んできている。絶望の淵に立たされたことも、きっとある。あくまでも「きっと」ですが。そしてそういう人達が、この狭い部屋に集まって話をしている。よく考えるとつどいという場所は凄まじいところじゃないか、と思えました。

などと言っている私自身はどうなのかといえば、「私はそれほどまでの苦勞は積んでいません」……と答えるべきでしょう。事実私は、吃音のことでそこまで嫌な思いをしたことがありません。だからその分、人間としての器がちっさいです。自分の器の小ささを、「一人一言」の話を聞いているうちに実感させられました。ここに来ている方々は、私以外、皆凄い。皆、苦勞を積んできた分、人間が大きくて強い。あー、自分はなんて小さいんだ。ミジンコサイズだ。私はつどいに来ている方々を尊敬したい気分です。私はもっと精進せねばならない、と思います。

精進するために何をするのかといえば、それはわかりません。まあとりあえず生きていれば、いつか少しずつ人間として大きくなれるんじゃないかと淡い期待は抱いています。とにかく、つどいの方々を見習わなければと思います。ある意味「凄い」つどいという場所で、少しでも時間を過ごせることを、私は光栄に感じます。

Y.H君（高3）

今回初めて参加しましたが、互いの吃音についての悩みを語るなどの普段できないことができて大変有意義な時間を過ごせました。以前は吃音は著しい短所と考えていましたが、サマーキャンプの後には個性であり、短所ではないと考えることができるようになりました。これからも宜しく願いいたします。

T.Hさん（高3 Y.H君のお母さん）

やっと息子を言友会に連れて行く事ができました。何度もつどいのお誘いをいただいたのに、都合でいけませんでした。（ごめんなさい）今回、幸運なことに近くの山中湖だったので気軽に参加させてもらいました。とは言え、急に日帰りにしてしまい、スタッフの皆様にご迷惑をお掛けいたしました。

初めての言友会、ましてキャンプ。やはり緊張しました。けれど楽しいゲームですっかりリラックスでき、打ち解けた雰囲気です話合いに入ることができました。

自己紹介では、吃音に悩む仲間に話す安心感からか、ずっとしまっておいた想いが一気に溢れ出てしまいました。まくしたてて話す私の姿は、私の様々な経験や困難が整理され、昇華されているどころか、暗く重い記憶として煩雑に心に刻まれたままであると自覚させるものでした。本当は、「笑顔で前向きに生きていけば、きっとなんとかなるよ。」と言いたかったのに。そんな私の話をじっと聴いて下さった皆様、司会の佐藤さん、ありがとうございました。

バーベキューや花火でも、スタッフの動きの良さはもちろんのこと、お互いを気遣い、穏やかな空気が流れている時間は学校のどの行事とも違う居心地の良さがありました。息子も同様だろうと想像しています。

夜、帰りの車内で、息子が話してくれました。「今日キャンプに行けて良かった。中学校から言友会を知っていたら、今が少し違っていたかも。」ようやく機が熟したのでしょうか。悠人自身からキャンプに行くと言っていたのですから、これをきっかけにいろいろな話を聞かせて欲しいです。とにかく、8月8日は息子が言友会と出会った日になりました。



.....

松本 ^{なおひろ}直大（スタッフ）

サマーキャンプでは様々なイベントがあり、それぞれが非常に思い出深いものであったのですが、今回は最も自分の印象に残った**論理療法の実践**を経たからの考え方の変化について書きたいと思います。

今回、サマーキャンプでの活動の一環として行われた論理療法の実践は、自分にとって非常に新鮮な驚きと発見を与えてくれました。自分は今まで吃音を終わりのない森であるとか、底の見えない海であるとか、抽象的でよくわからないものに例えて吃音から逃げ続けてきました。しかし、今回、吃音とは自分自身であるということにやっと気づけたような気がします。自分自身から逃げることは出来ない。吃音を受け入れてこれからはしっかりと歩いていこう。今はこんななんとなく清々しい気持ちです。今までの自分ならこれまでの人生を成功か失敗か問われたら、「失敗だった。」と答えると思います。でも、論理療法を学んだ今の自分ならば非常に前向きな答えになると思います。

今回の論理療法の実践では、皆吃音に対して様々な考え方を持っていることがわかりました。また、吃音に関する悩みや葛藤はそれぞれの置かれている状況は違えど、同じ側面をもっていると感じ、皆自分と同じように大変だなあと感じました。そのことを何となくでも共有できたことが、自分は純粋にとっても嬉しかったです。今後も論理療法の考え方は、吃音に関することだけに限らず、自分が将来大きな壁にぶつかった時に思い出して実践できるようにしていけたらいいなあ、と思います。